

項 目 名	ベッド柵、Y字帯、ミトン使用中
表 題	介護保険対応病棟に転入後、拘束廃止に向けての関わり
施 設 名	松山リハビリテーション病院（介護療養型医療施設）

1 利用者の状況

88歳 男性 要介護度5 痴呆性老人の日常生活自立度M

【病名（既往症）及び病状】

主病名 右被殻出血、左片麻痺（H12.2） 既往症 62歳頃 尿路結石
71歳頃 クモ膜下出血クリッピングOP

2 施設内の生活における現状や課題

【身体的な状況】

- 入院時、左片麻痺、麻痺レベル 左上下肢 0/ 右上下肢 3-4/、左上肢手指関節拘縮あり、左下肢関節拘縮あり寝たきり状態。摂食・嚥下障害あり、胃瘻造設。ADL全介助
- トランスファー全介助 坐位保持不安定
- 摂食機能障害のため、胃瘻栄養中（併用ゼリー 1個/日摂取）
- 喀痰吸引 5~6回/日行っているが、呼吸器合併症の危険性がある。
- 発語に乏しいが、調子の良い時は、単語レベルの発声程度である。

【痴呆の状況】

- HDS-R 測定不可
- 昼夜逆転がみられる。
- 意志の疎通が困難で常に介護を必要とする状態。

3 拘束に至った経過や原因と考えられるもの

H14.1 介護保険病棟へ入院。以前より、全身掻痒強く、皮膚の掻破傷を頻回に起こしていたため、清拭、軟膏塗布を行う。また、掻破予防のため、健側にミトンを使用するほか、体動も激しく転落などの事故防止と安全確保のため、4本柵を使用。車椅子移動中もバランスを崩すことがあり、やむを得ずY字帯を使用していた。

4 ケアカンファレンスでの意見や協議内容

- 車椅子坐位時において、Y字帯・ミトン除去への試み
- 2回/日、約1時間程度、車椅子坐位。その間、職員が見守り、テーブル使用にて書字を行う。（事務職に就いていたため、書字は好んで行っていた。）
- 掻痒感軽減に向けてのケアと評価。
- 日常生活にメリハリをつけ、昼夜逆転の軽減（活動と休息のバランス）への試み
- 家族への現状説明、（家族は拘束ミトン使用を希望されているが、全廃に向けて努力する。）

5 拘束廃止に取り組んだ過程や取り組み状況

H14.1 介護保険病棟へ入院する。拘束廃止についてのカンファレンスを行い、ベッド柵・Y字帯除去、車椅子坐位でのミトン除去、掻痒の軽減について取り組んだ。

ベッド柵は、麻痺側（左）の2本を1本とし、訪室回数を多くして、その都度姿勢を整えてるようにした。又、健側（右）のベッド柵の隙間に下肢が入り込むことがあり、ベッド柵にカバーを取りつけ、クッションを敷くことで転落や損傷も見られなくなった。

Y字帯については、車椅子坐面に三角クッションに滑り止めを付け、カットテーブルを使用することにより、取り除くことにした。患者の興味のある慣れ親しんでいる書字を行うことによって、その間はミトンを外せるようになった。

昼夜逆転については、日中の活動量増加目的のため、9時30分~11時、16時~17時の2回/日、車椅子坐位として、坐位の時間延長を図った。朝は書字、夕方はレクレーシ

ンに参加し、職員や他患者との交流を図り刺激を与えるようにした。結果、夜間の喀痰量も減少し、適度な疲労感もあるためか、よく眠れるようになった。

掻痒感の軽減については、以前より種々の軟膏塗布等を行っていたが、掻痒感がとれず、2回/日乾燥防止のため、オリーブ油希釈したお湯での清拭を行ってみた。しかし、あまり効果がみられず、鎮痒ローションを2回/日塗布した。掻痒感は、やや軽減されていたが、塗布部の紅斑、角化みられたため、中止。白色ワセリン3回/日塗布等、ステロイド内服開始にて現在、軽減の傾向にあり、経過観察中である。

6 改善の成果

ベッド柵については、4本からロング1本、ショート1本となったが、掻痒感の軽減により体動も減少し、転落の危険性は少なくなったと思われる。又、ベッド柵にカバー・クッションを併用する事により、外傷は見られなくなった。

Y字帯・ミトンについては、書字を行う事により、スタッフとの関わりが多くなり、坐位になることで本人への刺激となり、発語も増え、表情も豊かになった。ミトンは、薄いタオル地の手袋にし、書字の時は取り外している。掻痒感軽減の傾向にあるため、経過を見て手袋も廃止の予定である。

7 担当職員の感想、意見

取り組んでみて、職員の拘束廃止の意識、目的等を改めて学び、意識改革が図れたように思う。そこから職員間の情報交換・声掛け・申し送り・記録が徹底され、ケアの統一が行えるようになった。

このケースの場合、掻痒感を軽減させるために気を紛らわせるような何かがあれば、痒みを忘れる事ができ、転倒の危険性のあるような激しい体動を無くせるのではないだろうか考える。問題行動には必ず原因や理由があり、そういった原因を除去するケアを行うことで拘束を最小限に若しくは拘束をする必要がなくなるのではないかと思われる。しかし、現状では、まだ完全に原因となる掻痒感をなくすことができていないので、転倒・転落の危険性等考えられるため、不安が残る。

今後もより人権を尊重した生活を送れるようスタッフ全員が常に抑制廃止に向けての意識を持ち、改善に努めることを続けていきたいと思う。